

が、住民はもちろん国にもお金がなく、十分な対策が立てられていません。トリパノソーマを殺す薬剤はありますが、シャーガス病のワクチンや治療薬はありません。こうしたなかで、私たちは重症患者の遺伝子解析を行い、またトリパノソーマが人の細胞の中でどんなことをしているのかを分子レベルで解析し、ワクチンや治療薬の開発に結び付けようとしています。

同様に、マラリアやデング熱でも、遺伝子や免疫の解析を行っています。まだワクチンの開発には至っていませんが、遺伝子工学の発展はめざましく、将来、こうした感染症のワクチンや治療薬を開発できると確信し、努力を続けています。

次号(2016年7月号)では「長崎大学病院小児科」を取り上げます。

## 新興・再興感染症

### SFTS

(重症熱性血小板減少症候群)

### マダニからうつる新しく見つかった感染症 草むらなどでは肌を露出しないように

重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、中国の研究者らが2011年に初めて報告したウイルスによる感染症で、マダニに噛まれることによって感染します。

中国でみつかる前の2005年に、長崎県でも2例の報告がありました(当時は診断がつきませんでした)。国立感染症研究所によると、2016年4月までの患者数は西日本を中心に175人で、そのうち46人が死亡しています。日本で亡くなった方はいずれも50歳代以上で、70歳代以上が37人を占めています。2013年以降、長崎県でも9人の感染者が発生し、2人が亡くなりました。

マダニに噛まれてから発症するまでには、6日~2週間の潜伏期があります。発症すると、まず発熱や消化器症状(食欲低下、嘔気、嘔吐、下痢、腹痛)が現れます。さらに、頭痛、筋肉痛、神経症状(意識障害、けいれん、昏睡)、リンパ節腫脹、呼吸器症状(咳など)、出血症状(紫斑、下血)など、さまざまな症状を引き起こします。特に高齢者は重症化しやすく注意が必要です。

今のところ有効な薬剤やワクチンがなく、治療

はそれぞれの症状を抑える対症療法になります。したがって、マダニに噛まれないことが最も大切な予防法となります。もしマダニに噛まれたら、体調の変化に注意し、発熱などの症状が出た場合は、すぐに医療機関で診察を受けましょう。

マダニの主な生息場所は、野生動物が多い森林や草むらですが、民家の裏山や裏庭、畑やあぜ道にもいます。野山に行くときは、長袖、長ズボンなど肌を露出しない服装にします。また、虫除けスプレーなども併せて使用するとよいでしょう。

帰宅後は、服や皮膚にマダニがついていないかチェックします。マダニは、からだについてもすぐには吸血しないので、すぐにシャワーを浴びたり入浴したりすることで洗い流せます。

マダニは、SFTS以外にもさまざまな病気をうつします。もし吸血中のマダニが見つかった場合は、自分で除去することは難しいので、皮膚科を受診するようにしてください。

次号(2016年7月号)では、「デング熱」を取り上げます。